

岡山市埋蔵文化財発掘調査速報展2025

岡山市教育委員会文化財課
岡山市埋蔵文化財センター

かわいり い せき

川入遺跡

岡山市北区川入

川入遺跡は北区川入を中心に広がる集落遺跡です。新幹線や側道部分建設時に調査が行われ、弥生時代から中世にかけて各時期の集落等が見つかっています。また、土器をはじめとする遺物も多数出土しました。市道の拡幅に伴い発掘調査を行いました。調査地点は過去の調査地点から北へ600mの地点です。

調査の結果、弥生土器を包含する層と東西方向の溝を確認しました。弥生土器は中期後半から後期前半にかけてのもので壺や甕、高坏などの器種が出土しています。しかし、これらに伴う明確な遺構は見つかっていません。河道の埋土からは土師質土器碗と備前焼のすり鉢、獣骨が見つかりました。土器の時期から中世頃の溝と考えられます。

住居跡などは見つからないものの、川入遺跡との関連を含め一定の成果をあげることができました。

つくりやまだいいちごう こ ふん

造山第1号古墳

岡山市北区新庄下

造山第1号古墳は古墳時代中期の築造と考えられる径約40mの円墳で、造山古墳の陪塚の1つです。過去の発掘でコウヤマキ製の木棺が存在するとされ、馬形帯鉤や龍文透金具などが出土したと伝えられています。

古墳周辺の農道整備に伴って発掘調査をしました。調査区は農道整備予定地に沿って3本設定しました。調査の結果、近代の造成に伴い地山の一部は削平されていました。また、古墳に伴う遺構は確認できませんでした。遺物は埴輪や陶質土器が出土しましたが、いずれも近代の造成土の中からであり原位置ではありませんでした。

つくりやま こ ふん

造山古墳

岡山市北区新庄下

造山古墳は古墳時代中期に築造された墳長350mの前方後円墳で、全国第4位の規模を誇ります。墳頂は備中高松城水攻めの際に毛利方の砦として利用されており、特に、後円部墳頂付近には、曲輪や土塁、堅堀など当該期の遺構が残っています。

岡山市教育委員会では、平成26年度より古墳群の保存整備を目的として範囲等確認調査を継続的に実施しています。今回の発掘調査は、城郭遺構など当該期の遺構の確認および城郭施設構築に伴う後円部の改変状態の把握、古墳の状況確認を目的として、2つの調査区の発掘調査を行いました。

その結果、確認した2箇所の曲輪は、それぞれ古墳の墳丘を一部削平し、土を盛りなおす工法を採っていたことが分かりました。さらに、段状の曲輪の最下段の面では、柱列と幅の広い溝を確認しました。これらの正確な時期は不明ですが、防御的性格をもたせるために構築した可能性が考えられます。一方、古墳については、葦石を確認したほか、かなり高い地点での地山確認、造山古墳では新発見の鳥形埴輪の破片、弥生土器の発見など、造山古墳を考えるうえで重要な情報を入手することができました。

おかやまじょうさんの そとくる わ あと (ちゅうおうちゅう)

岡山城三之外曲輪跡 (中央中)

岡山市北区蕃山町

岡山城三之外曲輪は、近世岡山城を区画する中掘と外堀に囲まれた岡山城の最外郭にあたり、慶長5(1600)年から慶長7(1602)年のわずか2年の治世の間に小早川秀秋が整備したとされています。絵図や古図によれば、三之外曲輪内は大半が武家地であり、北西部には岡山藩主池田光政によって寛文9(1699)年に藩士子弟のための藩校が設けられました。藩校の建物は昭和20(1945)年の岡山空襲で焼失しましたが、?池は現在も岡山市立岡山中央中学校の敷地内に残存しています。

岡山市教育委員会では、平成16(2004)年と平成18・19(2006・2007)年に同校敷地内で校舎の建て替え・運動場の拡張工事に伴う発掘調査を行っており、藩学藩校やその後に建てられた岡山県女子師範学校に関する遺構、外曲輪創設以前の遺構などを確認しています。

今回の調査地点は岡山市立岡山中央中学校の敷地南東角であり、旧岡山藩藩学校の跡地にあたります。調査の結果、絵図と一致する藩学校のもの断定できる遺構はほぼ確認できませんでしたが、藩学校敷地内に残る遺構と、藩学校後に建てられた岡山師範学校の基礎とみられる遺構は確認できました。

まんとみ とう だい じ かわらがまあと

万富 東大寺瓦窯跡

岡山市東区瀬戸町万富

岡山市東区瀬戸町万富に所在する窯跡群で、吉井川右岸の低丘陵を中心に築かれました。源平合戦において焼失した東大寺を再建するため、俊乗房重源の主導により、当遺跡で東大寺に葺く瓦が生産されました。岡山市教育委員会では、令和3年度より窯跡の保存整備事業として範囲確認調査を始めました。令和6年度は過去に調査された礎石建物や土器窯の正確な位置と規模の把握と、令和5年度の調査で確認した灰原の範囲確認を目的として調査を行いました。

再検出した礎石は約50cm四方の扁平な石で、2.15m間隔で据え置かれます。検出した礎石から、建物は南北4間以上、東西3間以上の規模をもつことが分かりました。今回の調査で確認した土器窯は、窯突と有畦式平窯の2基で礎石建物のすぐ南側で確認されました。土層の関係から建物廃絶後に造営されたもので、窯突からは須恵質土器が、有畦式平窯からは土師質土器や瓦質土器が出土しており、窯の使い分けが想定されます。また、調査では前年度の調査でも確認された瓦列の続きや溝、柱穴群も確認されました。

埋蔵文化財
センター